The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	間接話法における時制 : 直示中心の移動か時制の一致か
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53776
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

間接話法における時制
ー直示中心の移動か時制の一致かー

井元秀剛

1. はじめに

Comrie (1985)のテンス論における重要な主張の一つにテンスの意味と統語規則との相互作用という考え方がある。テンスとは表現の対象となる事態の時間的位置関係を示すものであり、対象としての出来事がいつ起こったのかに応じて決まるというのが原則だが、この原則があてはまらない例があり、それはテンスの意味とは独立して作用する統語規則との相互作用によって説明ができる、というものである。その例の一つとして英語の間接話法の例が取り上げられている[1]。

(1) a. John said yesterday , "I shall leave tomorrow."

b. John said yesterday that he should leave today. (Comrie 1985:108)

間接話法とは意味的な観点からいうならばダイクシスにおける直示中心の移動である。(1a)における John の原発話に現れたダイクシス表現である人称の I、および副詞の tomorrow は、(1b)の間接話法において伝達者の直示中心からそれぞれ he, today として指定されている。問題は動詞のテンスである。一見すると元の発話の shall leave が過去の should leave に代わっているのであるから人称や副詞の転換と同じように、これも直示中心の移動現象の１つであるように見える。ところが、Comrie によれば、これはそうではなく、間接話法ではテンスは元の発話の形に従う。これが意味的要請であるが、それ以外に、主節の動詞が過去形であれば従属節の動詞も過去形にしなくてはならないという時制の一致という統語規則があり、元の発話のテンスにこの統語規則が適用された相互作用の結果として shoul leave が出力されたというのである。本稿はメンタルスペース理論の観点から、この場合の should leave は直示中心の移動の結果産出されたと考えるのが妥当であり、時制の一致という統語規則との相互作用と考えるより説明力の点で勝っているということを示すことがその目的である。以下 Comrie にならって時制の一致を説明の根拠にすえる Comrie の分析を時制の一致分析(sequence of tenses analysis)、直示中心の移動を根拠にすえる分析を直示中心分析(deictic centre analysis)と呼ぶことにする。

2. 時制の一致分析の根拠

ではなぜ Comrie は時制の一致分析をとるのであろうか。まず間接的な根拠として、同じく間接話法をもつロシア語において、人称や副詞は英語と同様に変化するのに、テンスは元の発話のテンスを維持するという現象をあげる。つまり言語においてテンスは直示中心の移動の対象にはならなくてもよい、ということをロシア語の例を使ってあげているわ

[1] 以下特に断らない限り、例文は Comrie のものを用いる。ただし例文番号や提示の仕方はこちらで調整してある。

けである。しかしこれは人称や副詞が移動するのだから、テンスも同じような原理で移動すると考えるのが妥当である、という要請が必ずしもできない、というより消極的な根拠にすぎず、直示中心分析より時制の一致分析がすぐれていることを積極的に示すものではない。

より積極的な根拠は、直示中心分析では誤った予測をするのに時制の一致分析では正しく予測される例がいくつかある、ということで３つの例があげられている。

2.1. 主節動詞が未来の場合の従属節の時制選択

主節動詞が未来の場合、直示中心分析では直示中心が未来に移動するはずであるが、実際は原発話の時制が保たれる。例えば

(2) a. John will say : "I am singing."
b. John will say that he will be singing.
c. John will say that he is singing.

この(2a)の間接話法として直示中心分析だと(2b)を出力することになる。直示中心が発話者に移ると、John からみた現在は発話者からみて未来になるはずだからである。ところが実際に(2a)の意味に正しく対応するのは(2c)であって(2b)だと、原発話も I will be singing.でなくてはならないのである。一方時制の一致分析は主節が過去形の場合にしか適応されないから、この場合は原発話のテンスがそのまま保たれることを予測するので、ただしく(2c)を出力することができる。

2.2. 主節動詞が未来の場合の過去形の解釈

現象としては前節と同じである。原発話の過去形は発話者からみて未来であっても過去形で表現される、ということをやや複雑な例を使って説明している。

(3) a. John will say on the twentieth of May : "I *arrived* on the sixteenth of May."
b. John will say on the twentieth of May that he *arrived* on the sixteenth of May.
c. *John will say on the twentieth of May that he *will arrive* on the sixteenth of May.
d. (?)John will say on the twentieth of May that he arrived tomorrow.

これは現在が５月の 15 日で、20 日つまり、伝達者からみて未来の時間に John が過去形で原発話を発したという想定である。John が到着すると言っているのは５月 16 日で、これは伝達者から見たら未来であるから、直示中心分析をとるなら(3c)でなくてはならない。しかし(3c)は完全な非文で、正しくは(3b)である。一方日付を副詞に変えた(3d)は話者によって判断が揺れ、Comrie にとっては全く問題ないが、許容しない話者もいるという。また英語と対照させたロシア語ではこの形は認められないらしい。ここからは時制と副詞の不一致を許容しない話者もいるということが示唆されている。しかし 2.1 で述べたこととここで述べていることは結局の所、「主節動詞が未来の場合、間接話法は原発話のテンスが

保持される」という単一の現象を述べているにすぎないことがわかる。

2.3. 主節動詞が過去または未来で、伝達者からみて現在を表す発話文

伝達者の現在の位置が 5 月 15 日であるとする。この日のことを原発話が過去形や未来形で表現していた場合にどうなるか、という問題である。まず主節が過去形のケースをみると

(4) a. John said : "I will be absent on the fifteenth of May.

b. John said that he *is* absent {on the fifteenth of May/today}.

c. John said that he *would be* absent {on the fifteenth of May/today}.

という(4a)から(4bc)への転換が予想される。直示中心分析に従うなら、現在は 5 月 15 日なのだから現在形で伝達してもよいはずで、(4b)の形が予想される。ところが(4b)は文法的には正しいが、意図した解釈ではない。一方時制の一致分析では元の発話が主節の過去形に一致するという規則によって正しく(4c)が出力できる。

同様の例ではあるが、伝達内容が現在ではなく過去になる例も付け加えられている。

(5) a. John said : "I will arrive on the fourteenth of May.

b. John said that he arrived {on the fourteenth of May/yesterday}.

c. John said that he would arrive {on the fourteenth of May/yesterday}.

時制の一致分析では正しく(5c)を予想するが、直示中心分析では(5c)とともに(5b)も予測してしまう。しかしながら(5b)は文法的ではあるが、John の到着が John の発話に先行している場合にしか使用できないから意図した意図とは違っているというのである。

主節が未来形の場合は、また 2.1 や 2.2 の場合と同様である。未来に今日のことを過去形で述べることになるとする。

(6) a. John will say : "I was absent on the fifteenth of May."

b. John will say that he *is* absent {on the fifteenth of May/today}.

c. John will say that he *was* absent {on the fifteenth of May/today}.

主節が未来の場合これまで見てきたように原発話のテンスがそのまま保持されるのであるから、時制の一致分析では(6a)の変換として正しく(6c)を予測する。しかし直示中心分析では(6b)を予測するが、これは意図された表現ではないとするものである。

2.4. 例外

Comrie はこれらの例に加えて、逆に自らの主張の例外を認めなければならない興味深い例というのも紹介している。よく知られていることだが、時制の一致は常に義務的に適応されるわけではない。

(7) a. John said : "I am ill."

b. John said that he is ill.

c. John said that he was ill.

(7b)は時制の一致原則からすると認められないが、もし伝達者が John が現在も病気であることを知っていれば用いることができるのである。これは一致の原則からすると認めら

れないはずであるから、例外として規則を緩めなくてはならない。逆に直示中心分析では出力可能であるから、ここではその方が有利であることを Comrie も認めている。しかしながら、伝達者が現在も John が病気であることを知っている状況にあっても(7c)は可能であり、これは時制の一致分析では説明できても直示中心分析では説明できないとしている。

また時制の一致には二つのバージョンがあるとも言う。

(8) a. John said : "I was ill."

b. John said that he was ill.

c. John said that he had been ill.

(8b)は過去形がそのまま用いられた例、(8c)は過去形に時制の一致原則が用いられてさらなる過去としての過去完了に転換された例である。主節の過去形にあわせるということでどちらも同じ現象のバリエーションで、どちらを適応してもよい、ということになっている。

3. 時制の一致分析の問題点

以上 Comrie の時制の一致分析とその根拠をみてきたが、ここでその問題点を指摘しておきたい。まず、説明するとはどういうことなのかという根本的な問いを建ててみたい。これは何も言語学に限ったことではないが、説明とは基本的に１つの現象を別のより抽象的な現象の１つの事例として関連づけることである。有名な $e=mc^2$ と言う公式も、それ自体では１つの現象を述べているにすぎないが、この規定によって一見ばらばらに見えるいくつかの現象がその帰結としてまとめられるから分析原理となりえるのである。今直示中心分析と時制の一致分析とが対立した原理として比較の対象になっているのであるが、説明すべき現象としてあるのは

(9) a. 直接話法の文を間接話法を用いて伝達する場合、主節が過去であれば、元の動詞の時制は過去形に転換される。

b. 直接話法の文を間接話法を用いて伝達する場合、主節が過去以外であれば、元の動詞の時制は転換されずにそのまま用いられる。

である。直示中心分析は少なくともこの(9a)について、テンスをダイクシス表現の一種であると考え、間接話法によって伝達者に直示中心が移動する現象の一つの帰結として説明するものである。この場合この説明が適応されるのはテンスだけではない、人称転換も副詞の転換も同じ現象の帰結であるからそれは説明原理たり得ているのである。直示中心の移動それ自体は現象の記述にすぎず、それ事態の説明があるわけではない、ただ、そもそも間接話法とは元の発話を伝達者の視点から伝え直すことであるから、そのような意味合いにそってなされる現象なのだ、という意味論的な根拠を与えることはできるだろう。

これに対し、時制の一致分析という統語規則は(9)の事実をそのまま原理として述べているに過ぎない。統語規則なので意味と独立して存在し、なぜそのような規則が存在するのか、ということは問われない。その原理を説明するさらに上位の原理がない、と言う点では直示中心分析も同様だが、直示中心分析には少なくても伝達者の視点から述べると言う意味論的な動機付けは存在するのである。もし意味論的な根拠を求めるのなら時制の一致

そのものも直示中心分析と同様の視点の移動に求めざるを得ないと思われる。尤もComrieがこの時制の一致原理と相互作用させた「間接話法でも元の発話のテンスが保持される」という原則については確かに意味論的な根拠が存在する。伝達する内容は元の発話の内容と異なってはならず、「必要のない限り同じ形を保持する」という原理は話法の転換にあたってのベースにあると考えて問題ないだろう。筆者が否定するのは時制の一致という統語規則の方であって、もう一方の意味的原理ではない。

確かに一見すると直示中心分析は(9b)を予測せず、時制の一致分析のみが正しく(9b)を予測しているように見える。しかし、時制の一致分析とは(9a)をそのまま原理としてたてているだけであって、なぜ時制の一致が未来に適応されないのかについて何も語ってはいない。つまり(9a)の現象そのものを時制の一致と呼び、なぜ(9)のような現象があるかというと(9a)のような規則があり、これに元の発話を変えてはいけないという原則から帰結する(9b)があるからだと言っているだけであって、何も言っていないに等しいのである。

ある規則が説明力を持つのは、その規則から帰結する現象が複数存在する場合である。この点で比較すると、直示中心分析は間接話法のテンス以外にも、人称の転換や副詞の転換を説明できるが、時制の一致が説明するのは主節が過去に置かれたときの間接話法のテンス以外には何もない。そもそも一致させるためには、それと異なる元の形というのがなくてはならず、そのような形は伝達される前の直接話法の形ぐらいしか考えられないので、他にこの原理が適用できないのである。もちろん、ここでいう間接話法とはsayやtellといった純粋に伝達動詞によって伝えられるものに限らず、thinkやbelieveなどによって伝達される内容も広い意味での間接話法ととらえれば、ということにはなる。しかし、それ以外にはおそらく適応できない。例えば

(10) John met a girl who *was wearing* a green hat.

のwas wearingである。本来「会ったときに着ている」のであるから元の形はis wearingであって、これが時制の一致によってwas wearingになったのだ、などのような一般化ができるのなら、間接話法のテンスにとどまらない主節と従属節の間のテンスを規定する規則として一般化され、間接話法のテンスはその一般的な原理の一つの帰結として説明されることになる。しかしながらこのような一般的な主節と従属節の関係にまで拡張すると(そして通常言われている「時制の一致」とは正にこのような一般的な現象を呼んでいるのだと思われるが)、今度はこの原理では(9b)を説明することができなくなる。

(11) John will meet a girl tomorrow who *will be wearing* a green hat (tomorrow).
(Cutrer 1994:328)

元の形というのがあるとすれば、それは(10)と同じはずだからis wearingのはずなのに、ここでは正にその時制の一致がこの未来にも適応されてwill be wearingとなっている。ということは「時制の一致は過去形にしか適応されない」ということは言えなくなるのである。結局時制の一致分析は何も説明していないと結論づけざるを得ないのである。

4. メンタルスペース理論による現象の説明

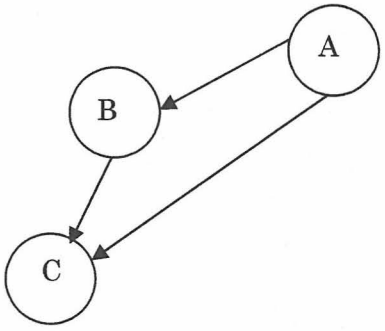
以下は主として Cutrer (1994)の分析であり、井元 (2010)で一部修正をくわえているものの本稿による新しい提案というわけではない。

4.1. 直示中心の移動による二つの経路

メンタルスペースによる時制論では発話者の現在にあたるスペースを BASE と呼ぶ。間接話法を用いて他者の発話を伝達するということは BASE を伝達者の現在の位置におく、ということである。英語は絶対テンスを用いる言語であり、定動詞は必ず BASE からの経路を示しているというのは英語の時制全般に対する原理であり、間接話法のテンスもこの原理の支配をうける。BASE が原発話者の現在から伝達者の現在に移る、ということは上で述べた直示中心の移動そのものである。

ここで動詞の事行が登録されるスペース EVENT に BASE からアクセスする経路が２つあることをまず確認したい。例として(8)をとりあげる。Comrie によると時制の一致による二つのバージョンということなのだが、それは直示中心分析からみても同様である。図示すると以下のようになる。スペースの左側が過去、右側が未来の方向を表す。

(12)

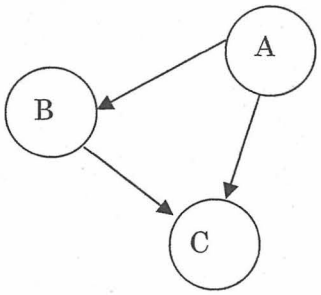


このとき A が BASE であり、B が John が最初の発話を発したスペース、C が John が病気であったというスペースであり、ここが EVENT である。今 C の状況を had been ill と表現するか was ill と表現するかが問題になっている。B を経由せずこの C に直接アクセスした経路が(8b)の was ill の形であり、伝達者からみても C は過去だから過去形になっていると考えるのである。この過去形は Comrie の観点からすると元の発話の過去形のままであり、同じ過去形であっても上の図では B から C への関係を示したことになり解釈が異なる。この A から C に直接アクセスする場合、A が BASE と V-POINT、C が FOCUS と EVENT になる。これに対し B を経由して C にアクセスする経路をとったのが(8c)had been ill の形である。これは伝達される John の視点も伝達内容に取りこんだものであり、このとき、A が BASE、B が V-POINT、C が FOCUS と EVENT になる。このように直示中心分析による場合も(8bc)はどちらも、直示中心移動がなされた結果の出力であり、この分析に従う限り、常に原理上はこの二つのの経路が存在することになる。

次に原発話が未来で、主節が過去となる場合を考える。(1)や(4)(5)のようなケースである。図示すると(13)のようになる。ここでも原理上は BASE である A から原発話者の BASE

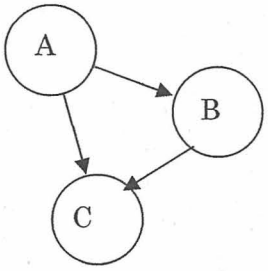
であったBをV-POINTとしEVENTのCに至る経路と、直接AからCに至る経路の二つが存在する。このAからCへ直接至る経路が(4b)(5b)であり、Comrieの批判は直示中心分析ではこれらを誤って予測しているとして批判しているのである。一方(4c)(5c)はBをV-POINTとして経由する第二の経路であり、直示中心分析でも正しく予測される間接話法の代表的なスタイルに他ならない。

(13)



最後に主節が未来となる形を考える。これはBがAから見て未来の位置にくるので、(3)のケースを図示すると(14)のような形になる。

(14)



Comrieの主張はこのときはB→Cの関係が従属節のテンスになり、過去なら過去、現在なら現在であるということである。実際(3)はそうであることを示している。このとき直示中心分析が予測するのはA→Cという直接アクセスする経路(3c)と、Bを経由してCに至るwill have arrivedとなる二つの経路であるが、どちらも実際には生じない。

5. 直示中心分析からの解決策

以上見てきたように、直示中心分析ではComrieが指摘した問題が確かに残る。これに対してどのような解決策が可能であろうか。実はCutrer (1994)がすでにメンタルスペース理論の立場から解決策を提示している。彼女が提案するのはFACT / PREDICTION原理と呼ぶもので、原文の規定は以下の通りである。

(15) a. A space which is FACT in relation to V-POINT/@ cannot be accessed from V-POINT/BASE with a PREDICTION marker.

b. A space which is PREDICTION in relation to V-POINT/@ cannot be accessed from V-POINT/BASE with a FACT marker. (Cutrer 1994:359)

彼女によれば、未来形はPREDICTIONという属性を、過去形と現在形はFACTと言う属性をもっている。このことは容易に理解できるだろう。未来のことは、時に日本語でも「～

だろう」のような予想の助動詞が付されるように、断定ではなく推量として述べられるものである。「明日の会議は 9 時から始まる」のように予定として述べる場合は英語でも日本語でも現在形で、この場合は断定しているのである。現在形や過去形はそうである、という事実を断定するものである、ということも納得できるだろう。(15)の V-POINT/@とは原発話者の BASE のことである。(15)はこのような形で書けば複雑であるが、要するに「PREDICTION として述べられたものは PREDICTION として伝えなくてはならず、FACT として述べられたものは FACT として伝えられなくてはならない」ということを言っているのである。

さて、間接話法の時制に関して、Comrie の時制の一致分析と Cutrer の直示中心分析を比較すると、どちらも二つの原理の複合(相互作用)から成り立っている。改めてその原理を対比してみると Comrie の時制の一致分析は

(16) a. 間接話法のテンスは原発話のテンスをそのまま用いる。

b. 主節が過去形の時は従属節のテンスは時制の一致の適応をうける。

これに対し、Cutrer の直示中心分析は

(17) a. 間接話法では従属節のテンスは伝達者の BASE を直示中心として出力される。

b. FACT / PREDICTION 原理に違反する経路は出力されない。

である。(16a)は意味論的な根拠をもつのに対し、(16b)は統語規則とされ、そのような根拠を問題にしないし、アドホックなものであって、間接話法のテンス以外の現象を説明しないことはすでに述べた。これに対し(17ab)はどちらも意味論的な根拠をもち、特に(17b)は(17a)と同じ「元の発話の内容を変えてはならない」という要請からくるものなのである。

では(17)が Comrie の批判したかなりの部分を説明することをみておこう。まず、(2)(3)について、原発話は現在形と過去形でありどちらも FACT であるから(17b)により PREDICTION として述べることは許されない。従って(2b)(3c)の形は排除される。ただしこの段階では、なぜ(2c)(3d)の形になるのかは説明されない。これについては後ほど述べる。(4)(5)については原発話が未来であるから PREDICTION であり、PREDICTION として述べなくてはならず、(4b)(5b)が排除され(4c)(5c)が出力されるので完全に説明できる。(6)は FACT / PREDICTION 原理の文字通りの適応では説明できない。過去形も現在形もともに FACT であるから、直示中心の移動により、過去形が現在形で表現されてもおかしくないはずである。ただし、原理の大本である「内容を変えてはならない」という趣旨にさかのぼればこの原理を拡張することも許されるだろう。つまり、過去形で I was absent と述べることと、現在形で I am absent と述べることは単なる時間の問題だけではなく、内容も異なり、前者は報告であるのに対し、後者は予定の通達である。「過去形で述べられた内容を現在形に転換して伝達することはできない」という一般化も可能であると思われる。

(17)のさらなる利点は、時制の一致分析では例外として説明の対象にならなかった(7)も

正しく予測することができる点である。まず(7c)は基本の経路だから問題ないだろう。仮に伝達者が John が現在も病気であることを知っていたとしても、過去のその時の発話をそのまま伝達する意図があれば、過去形で表現することも問題ない。その時には現在も病気であるか否かは問題にならず、現在も病気のままであることを伝える意図が伝達者にないだけであるから、この時の伝達者の知識は直接伝達内容には関わらず、なんの問題も生じない。一方(7c)が認められるのは現在も John が病気である場合で、この時は FACT / PREDICTION 原理に違反しないので、A→C の直接アクセスする経路が出力されるのである。同様の例は未来の場合でも生じる。

(18) a. John said："I will go to the party."

b. John said that he would go to the party.

c. John said that he will go to the party.

(18c)は John がパーティーに行くのが、今でも未来のままだと用いることができる。これは原発話が PREDICTION であるから A→C の経路をとって BASE から直接未来形を使ってアクセスしても PREDICTION のまま述べることになって FACT / PREDICTION 原理に違反しないのである。時制の一致分析ではこれは例外としてしか処理できない。(17)によって間接話法を説明するなら(11)の処理も問題にはならない。(11)に原発話はないのであるから FACT / PREDICTION 原理などかからず、主節も従属節も BASE からの視点をとってどちらも未来形で表現することができるのである。

6. 主節が未来における現在形や過去形の出力

最後に(17)でも説明しきれなかった(2c)(3b)の出力について考えてみたい。FACT / PREDICTION 原理は、直示中心を伝達者の BASE とする二つの経路を二つとも排除するが、(17a)から(2c)(3b)は出力されない。この場合(17)の原理では出力するものがなくなるのでやむを得ず(16a)が適応されるのだ、と考えることも可能である。実際 Cutrer は V-POINT/@から直接アクセスする経路というのも想定しており、この場合はそのような経路をたどるという。そうすると、主節が未来の場合の出力については Comrie の考え方とあまり変わらないと言わなくてはならない。しかしこれは直示中心分析に例外規定をもうけることであり、その原理の一般性があやしくなる。そもそも直示中心分析はメンタルスペース理論の立場からするなら、より大きな一般則である「英語の定動詞は BASE からの経路を常に保持している」からの帰結であって、理論の根本をも揺るがしかねない。筆者は井元 (2010)で、未来の場合も(14)の図でいうなら A→B→C の経路をとるのだと主張した。A→B の部分、すなわち BASE→V-POINT の部分は、スペースの時間関係だけで言えば未来にあたる。この部分が現在形として表現されるために、「現在形＋B→C を表すテンス」となって出力されるため、表面的には原発話のテンスがそのまま保持されているようにみえるのだ、という内容である。そもそも英語の未来形は、現在形に prediction のマーカーが加わったもので結果的にそのようにふるまっているだけであって、未来を表すことが本義なのではなく、あくまでも prediction というモダリティーをあらわしているにすぎ

ない。形態的にも will は助動詞であって、動詞の活用語尾によって示されているわけではない。助動詞は基本的にモダリティーを表すために使われるものであってテンスのマーカーではないのである。日本語にも未来形は存在せず、あえて表そうとするなら「～だろう」のようなやはり推量を表す助動詞による以外にない。原理的にはこれと同じである。ただ、英語の場合、未来のことを述べる場合には基本的に内容が prediction にならざるをえず、prediction は prediction として表現されなくてはならない、という意味論的な制約が加わる。そのため、未来の記述はほとんどの場合 will が用いられているように見えるため、will は未来形のようなふるまいをするにすぎないのである。実際未来のことであっても FACT の属性が付与される内容は現在形で表現される。The train *starts* at 7.のように確実な予定を表す場合や、I will go when he *comes*.のように未来の出来事を措定する場合などがそうである。現在形や過去形で表現された原発話は FACT の属性を付与されているわけだから、これを表現するために A→B→C 全体の内部構造にあたる A→B の部分も現在形で表現されるべき価値を有していると考えることに何の問題もないと考える。

7. 結論

以上の考察から、間接話法のテンスのふるまいについて、時制の一致分析に比べて直示中心分析の方がはるかに一般性をもち、説明力も高いことがわかる。ただ直示中心が未来に移行するケースについては英語の場合について一通りの説明が可能であるが、それがどこまで一般化可能な原理であるかはまだわからない。フランス語の未来形は文字通り未来としてのテンス価値を有していると井元 (2010)では考えている。しかしながらそのフランス語の場合でも(3)のケースでは(3b)に相当するテンスが選択されるのである。このような未来のケースについてはまた稿を改めて考えてみたい。

参考文献

Comrie, B. (1985), *Tense*, Cambridge University Press.

Cutrer, M. (1994), *Time and tense in narrative and in everyday language.* Ph.D.thesis, University of California San Diego.

井元秀剛 (2010)『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房.

尚本研究は JSPS 科研費 26370448 の助成を受けて行われたものである。